



書評論文 モノで人間を知る 物質文化研究の新たな試み：ダニエル・ミラー編 Material cultures: Why some things matter **を手がかりとして**

著者	ラウルナ フローランス
雑誌名	現代民俗学研究
号	2
ページ	57-70
発行年	2010-03
権利	現代民俗学会
その他のタイトル	Understanding the Human Experience through Objects: Challenges for Material Culture Studies: Daniel Miller's Material cultures: Why some things matter
URL	http://hdl.handle.net/2241/00143552

モノで人間を知る

—物質文化研究の新たな試み：ダニエル・ミラー編
Material cultures: Why some things matter を手がかりとして—

フローランス・ラウルナ *

Florence LAHOURNAT

Understanding the Human Experience through Objects

Challenges for Material Culture Studies:
Daniel Miller's *Material cultures: Why some things matter*

From the 18e century collections of curiosities to modern days ethnographic endeavors, material culture has offered insights into people's life and customs and, as such, has been part of the academic world.

Mostly used as a tool to support researches with a larger spectrum and a different focus, material culture has seldom been studied for itself. The fear of fetishism contributed to this avoidance of objects as the central preoccupation of research, and still remains sometimes an obstacle to a positive approach of material culture as a deserving area of academia.

A renewal in the academic interest towards material culture, rising since the mid 90', seems to be changing this tendency. Breaking away from the once common Marxist-oriented approaches as well as the semiotic analyses, material culture studies have started to embrace a more cultural and ethnographic approach. In this new turn of event, objects are not understood as mere commodities or symbols anymore, but as counterparts and expressions of social and personal life.

With the will to call attention to the need for a non-reductionist approach of material culture, this article first focuses on the evolution material culture studies have gone through, and the ever changing relationships between researchers and material culture. It then describes a new and encouraging trend in these studies, using Daniel Miller's *Material Cultures: Why some things matter* as an example of material culture studies freed from the weigh of academic boundaries.

キーワード：物質文化 モノ 人類学 ダニエル・ミラー

* 筑波大学人文社会科学研究所

はじめに

我々の生活は、他のどの時代と比べても、モノとの出会いが甚だしく多いのが特徴であるといえるだろう。我々は、モノを選び、様々な形でモノを使用し、コーヒーを飲んだりメールを送信するといった日常的な行為のためにモノと共同作業をおこなっている。モノは、我々の日常生活の一部となっているのである。これらモノは個々の具体的な事象であると同時に、モノに関わる人の持つ様々な感情を映し出すこともできる。モノの存在及び遍在性というモノが持つ本質的な側面を考えた時、最も身近なモノであっても重要でないモノはひとつもない、ということが分かる。人は、自分たちがモノを支配し、モノを操り、自分たちの意思でモノを選びかつ使用しているのだ、と考える傾向がある。ある意味、それは正しいといえる。しかしながら、モノも我々に対してある種の力（影響力）を持っていると考えることも、また正しいように思われる。モノが、果てしない消費主義的願望や技術支配によって我々を裏切り、我々を搾取し、我々に服従を強いる、というような観点から、そう考えるのではない。内省的な自己理解や、自己実現のために、そして文化や社会といった範疇を自在に旅するために、人がモノを利用しているという意味で、そう考えるのである。

本稿の主たる目的は、物質文化研究の歴史及び進展の中で見られた新しい傾向の位置づけをおこなうことで、この研究材料として扱える素材の幅広さとともに方法論上の魅力を示すことにある。1980年代の中頃以降、ロンドン大学の人類学科によって作られた新たな流れがあることに気づく。この流れにおける代表的な人物の1人としてダニエル・ミラーがいる。彼が1998年に編集し自らも寄稿した論文集 *Material cultures : Why some things matter* 『マテリアルカルチャーズ：何故ある種のモノは重要なのか』（Chicago: University Press of Chicago, 243p. 以後『マテリアルカルチャーズ』とする）を後ほど検証するが、この著作は、物質文化研究の新しい傾向を代表するものであるとともに、物質文化研究という分野からの新たな発展及び可能性を映し出していると思えるのである。現代の民俗学を豊かにする様々なヒントが、この論文集には凝縮されたかたちであらわれていると思えるのである。

1. 物質文化研究の世界

（1）物質文化への主たる理論的アプローチ

モノを解釈することにあたって使われてきた物質文化研究における主たる理論的アプローチを概観したい。

まず、マルクス主義的アプローチに由来する理論がある。この理論の主要な概念は、モノは人の仕事が物質化したものであり、それぞれのモノが、「便利な道具（コモディティ）」として、人の能力の搾取及び人の創造性と自由の究極の劣化を表している、というものである。マルクス主義的思想を洗練させた思想家たちは更に考え方を発展させ、社会の中に溢れているモノは、人間に精神的な害をもたらしかねない諸悪の根源であると考え、モノは、創造性を殺し、感情的な欲求につけこみ、人が本当に必要とするのではない、うわべだけの人間文化の発展を助長する、と

指摘している。ここでは、モノは何よりも先ず「資本主義的物質」なのである。マルクス主義的アプローチではモノが「便利な道具」かどうかという観点からしか検討されないため、それらモノが使用者である人々の実際の社会生活において肯定的もしくは建設的な意味を持ち得る可能性はその存在さえ否定されてしまうのである。この思想においては、主体と客体の関係について論じる時、議論の中心になるのは主体であり、客体が主体に及ぼす（悪）影響である。19世紀の哲学は、こうした問いを抱え、それに答えようとしてきた。

モノの創造と使用の中に疎外の様相を見つけたカール・マルクスは、このプロセスの政治的かつ社会的側面を分析の中に導入した。彼のアプローチは、物質文化を社会経済的事実と関連させるというものである。このアプローチが、現在のモノの解釈方法とどれほど対極的であるかということを理解するために、マルクス主義的アプローチの概略をまとめてみる。モノを作る労働者は、それを我が物とすることができない。彼らのモノではないからである、ということになる。つまり、製品の希少性を管理したり、機械の生産スピードを調整したり、また、複雑化する機械の代わりを人に務めさせたり等々、モノは支配階級が労働者階級を支配するための「便利な道具」なのである [Marx 1959 (1867)]。資本主義下では、モノを我が物とすることは（それらを作っている人々の）大半にとって不可能なことである故に、モノと主体を結ぶ関係はネガティブな疎外のプロセスになるのである。マルクスの思想の中で、とくに取り上げるべき点は、彼が人とモノの物質性に着目し、人とモノの関係の中に支配の構造と権力関係という概念を導入した、という点である。マルクス主義の継承者たちの疎外論は、モノとの関係におけるプラスとマイナスの側面に関する精神的かつ政治的議論に終始することが多い。究極的な論点は、つまるところ、モノが人を束縛するか束縛を解くかを知ることにあるが、モノとの弁証法的関係においてはどちらもあり得るのである。

第2に、構造主義記号論的アプローチを集めた理論がある。この理論の特徴は、何よりも先ず、「モノが持っていると思われる象徴的意味に注意をむける」ということである。この点、(モノの)存在意義の問題が政治経済的問題の中に埋もれているマルクス主義的アプローチからは距離をおいていることが分かる。モノは、他のモノとの関わりの中で定められる意味を持つのである。その中には、フェルディナン・ド・ソシュールのシニフィアン／シニフィエの分析モデルも含まれる。つまりモノは、それ自身ではない別のものに基づいて意味づけられる、と考えられる。この構造主義的記号論の考え方は、記号体系におけるモノの関係性を強調するもので、その総意とは、「モノは意味を持つ」ということにある。言葉のように、モノは言語を構成し、メッセージの伝播に関与するのである。記号論は、記号の意味の存在を想定している。「ある人が自らの経験とモノを関連づける時、そのモノはその人にとって意味を持つ」というプロセスである。このように、主体とモノ（認識）の関係は複雑なものであり、諸条件の無限の連鎖の上に成り立っているのである。

この考え方においては、主体はモノが伝えるメッセージの受動的な受信者ではない。能動的な認識プロセスによって意味を作り上げるからである。同じモノが、全ての人にとって同じことを意味するとは限らないのである。モノは多義的なものである。こうした考えから、意味は個人の経験や社会的相互作用の結果として生じるものであり、意味はモノの中に宿るのではなく社会的に作られるのだ、という考えが生まれるのである。このアプローチに対する最も率直な批判は、モノは単なる記号ではなく、物質文化は単なる記号体系ではない、という考えである。考古学者や

民族学者は、モノと言語を過度に同一視することを批判した。何故なら、（道具を記号として扱うという）間違いを起こす原因にもなるし、その分析において、モノの物質性も特有の機能も考慮されていないからである。構造主義記号論的アプローチの重要な点は、モノが意味を持っていること、モノが主体との関係とは独立した意味を持っていることを想定していることにある。しかしながら、構造主義記号論的アプローチへの主だった批判は、モノの物質性を考慮していないこと、人的背景から分離しようとしていること、そして、人の経験の言葉で表されない部分を考慮していないこと、に向けられてきた。

最後に、物質文明の解釈に関する第3の理論として、文化的アプローチがある。このアプローチの主要な概念は、モノが重要な文化的意味を持っていて、特定の文化の輪郭（社会的アイデンティティを形成したり社会的地位を定義することを可能にする社会的な違い）を示す文化的作業をおこなうことがよくある、というものである。文化人類学の最近の研究の大半は、「消費物の文化的性格」、別の言い方をすると「人が取得・使用するモノの社会的・文化的・感情的能力」に関心を寄せてきた。このアプローチと記号論的アプローチは、「モノは文化の実践とプロセスの重大な要素である」という考え方を共有している。

文化的アプローチは、マルクス主義的アプローチのほぼ対極に位置するが、構造主義記号論的アプローチとは幾つかの類似点を持っている。マルクス主義的アプローチは、モノの中に意味を見出すことができる可能性を否定しているが、文化的アプローチは、モノの有意味性を強調している。その一方、構造主義的アプローチが文化的に形成された言語的コミュニケーション体系におけるモノと記号の関係性を強調しているのに対し、文化的アプローチは意味の形成に開かれた考え方を提案している。文化的コードや物語や記号が文化的言語のひとつの形態として機能するという考え方は、すでに議論の余地のないものと見做されており、ソシュールやレヴィ＝ストロースの研究から派生したものとは考えられていない。その代わり、文化的アプローチは、厳格な記号論的伝播モデルに基づくことなく、意味を形成するモノの能力を強調している。

この理論のカギとなる要素は、文化的な生活は、主に分類と部類の形成・仲介・維持を通して機能する、というエミール・デュルケムの考え方である。人やモノや出来事を分類することで、人は共同体や価値観や信念に境界線を引くことができるのである。このアプローチがもたらした考え方は、モノを社会と文化の形成における周辺（付属的）要素と見做さない、ということである。また、モノを従属的なものとみなし、合理化・活用・技術的決定論によって（人を）空にすると捉えてきた近代的な考え方に批判を加えた他、消費物は、個人主義の集積としての文化を象徴している、とするポストモダン一流の考え方にも修正を迫っている。文化的アプローチは、文化の輪郭を理解するためには、最も日常的なモノにも注意を払う必要がある、という前提からはじまる。

本稿の目的は、デュルケムやモースの全ての著作を検証することではない。彼らの研究に光を当て、物質文化の基本理論及び分析ツールとなるものを見出し、現代の潮流を作ってきたミラーの研究への道筋を示すことである。

モースとデュルケムは、人文科学、特に社会学のカギとなるのは、文化的分類の方法である、と主張している [Durkheim, Mauss 1903: 42-46]。つまり、民族学者の仕事は、「人がおこなった分類を発見すること」だと述べている。それらの分類は、日常生活の基盤を形成し、根本的な文化的行為を構成する（例：「良いか悪いか」「綺麗か醜いか」「裕福か貧乏か」「自分か他人か」を

判断する)。こうした方法は、本質的に象徴的な体系であり、自然界のモノと社会界のモノを分類することを可能にするのであり、体系的かつ象徴的に人間世界の事象をまとめることを可能にするのである。人が持つこの「分類癖」は、すべての物事に文化的価値を積極的に割り当てようとすることから生まれるとされている。

デュルケムは、この分類論を発展させている [Durkheim 1968 (1912) : 9-23]。彼は、社会の特殊な性格を理解する上で、人と世界全般をつなぐ表象体系が重要であると強調している。人にとって分類は理解のための技法であり、思想を支え、思想の境界を定める枠組みでもある。デュルケムは、「分類とは、単に技術的遂行というだけでなく、それらが持つ精神的特性（与えられた価値）が文化的権威を与える機能もある」と言明している。モノの分類は、それ自体が精神的な力を持っている。だからこそ分類の持つ精神的な力は、分類に感情的な深さと永続性を与える源となっているのである。

デュルケムの研究の中で触れられているもうひとつの物質文化の研究にとって重要かつ有用な点は、「分類方法の存在そのものが、表象体系には社会的性格があるということを証明している」ということである [Durkheim 1968 (1912) : 9-14]。彼は、社会的存在である人間は「考えて行動する時、自然に自己を超越する」と述べている。つまり、人やモノを分類するために使われている体系は、集団の意識と結びついているのである。

それぞれのアプローチとその特徴を見てきた。マルクス主義的アプローチは、モノの物質性を考慮することを可能にし、記号論的アプローチは、それを考慮せずモノを言葉と同一視することの特徴としている。

（２）物質文化研究の新たな道—ロンドン大学の寄与とダニエル・ミラー

ここまで述べてきたことを以下にまとめたい。文化的アプローチをより正確に定義するならば、それはマルクス主義的アプローチとはほぼ正反対のものであるが、構造主義的及び記号論的発想とは相似点が多いといえよう。つまり、マルクス主義的アプローチは、人間がモノの中に意味を見出す可能性を否定しているが、文化的アプローチは、モノの「有意味性」を強調している。構造主義記号論的アプローチは文化的な言語コミュニケーション体系におけるモノ（記号）の関係性を強調しているが、文化的アプローチは意味の創造に対してより幅広い可能性を持たせたアプローチである。ある意味、文化的アプローチにおいては、文化的コードや文化的伝達手段のように機能する象徴が存在するという考え方が、自明の理であると見做されている（象徴的コミュニケーションモデルの本質を説明するためにわざわざソシュールやレヴィ＝ストロースにまで遡って説明をはじめめる必要は殆どないと考えられている）。文化的アプローチは寧ろ、厳格な記号論のモデルに頼ることなく、モノが意味を形成する能力を強調している。

また、文化的アプローチにおいて重要な点は、文化的生活とは、主に分類及び部類の形成・仲介・維持に基づいているという、デュルケム流の考え方である。人やモノや出来事を分類することによって、人は共同体や価値観や信念に境界線を引くことができるのである。こうした分類は、単なる精神的・技術的・合理的過程ではない。人は、日常生活の中で、殆ど学術的ともいえる方法で分類をおこなっているが、そうして形成されたカテゴリーは精神的な力を得るのである。カテゴリーの形成と同時に、人の思考には、合理性を保とうとしてカテゴリーに矛盾するものを排除しようとするような自律的な力が発生してしまうものである。

現代の消費社会にデュルケム流の考え方を当てはめた最初の人物として、メアリー・ダグラスとバロン・イシャーウッド⁽¹⁾の名前を挙げることができる。彼らの基本的な主張は、モノは、考えたり差異化したり分類したりするための力の源である、という考えである。消費物は、資本主義的生産システムの産物であると同時に、社会的な意味も持っている。ダグラスとイシャーウッドは、消費物の経済的及び機能的側面に注目するよりは、モノを考えるための有効なベースとして消費物を扱う必要を強調している。別の言い方をすれば、モノは、人生、他者、広い意味での文化を理解することを可能にしているのである（ここにはレヴィ＝ストロースの影響が読み取れる）。

ここで、研究対象としての物質文化の扱い方には変化が見られる。物質文化は、古典的人类学においては、真性ではあるが同時に原始的であるため真性の下位の形態と見做される傾向が目立つ。マルクス理論においては、資本主義的抑圧の対象と見做されている。ポストモダン主義においては、外観に執着した時代の表面的な排出物と見做されている。物質文化研究を刷新するためには、研究を著しく萎縮させているこれらの学術的傾向を断ち切らなければならなかったのである。そしてそのような中で生まれたのが、ダニエル・ミラーをはじめとするロンドン大学の人類学科に端を発し、1980年代の中頃から形成がはじまることとなった現代的な物質文化研究の流れにほかならない。

ミラーは、彼の主要な著作である *Material Culture and Mass Consumption*（『物質文化と大量消費』）の中で、「消費の研究」及び広義での「物質文化研究」は、社会における人とモノの関係を認識しかつ前面に出すべきである、と主張している [Miller 1987: vii]。ミラーは、それまでの学術論の還元主義的傾向と決別し、近代の大量消費の研究に人類学的視点を直接適用することができる、と主張する。我々は、溢れるモノによって埋め尽くされている今日の社会生活の中を生きているにも関わらず、物質文化への理論的及び概念的理解はいまだ初歩的である、とミラーは指摘している。その理由について、ミラーは幾つかの理由を述べている。それは主として消費文化及び物質文化の学術的研究において、モノが「価値のない、くだらないモノ」もしくは「抑圧的なモノ」と見做されている、という点である。ミラーは、真実性・抑圧・表面性についての古い論争から脱却し、消費社会を真正面から考えようとしているのである [Miller 1987: 85-97]。

ミラーが開いた新たな領域には、主に2つの方向性がある。その2つが、物質文化研究の刷新への第一歩となっている。ひとつめには、「消費文化が我々に強いること」ばかりに執心すべきではなく、研究者たちが殆ど関心を持ってこなかった「消費文化が我々に及ぼすことや考えさせてくれること」という観点に注意を払うべきである、という指摘である [Miller 1987: 167]。ふたつめには、それまでの物質文化研究との大きな違いとして、主な関心事が経済現象から消費者へ移っている、ということである。実際のところ、消費者は、自らが手に入れるモノから意味を作り出す。ここに至り、消費の研究において中心に据えられていた生産過程及び交易過程の分析は、消費者が体験する意味の研究に取って代わったのである。（文化的及び記号論的）意味の形成に関するこの重要な研究が、中心的なテーマになったのである。

このように、ミラーの寄与もあって物質文化研究の観点は更新されてきた。この新しい傾向は、「消費者」と「消費者が選んだ大量消費物」の関係を重視する。「これらのモノをどのように理解するか?」「それらの意味をどう定義するか?」が、主な関心となり、社会的・文化的・精神的過程として理解する必要がある、と主張している点が、特徴的である。

このアプローチの利点のひとつは、消費及びモノに関する単純化された理論を引き起こす還元主義を避けることができる点である。これは、消費研究において物事を見る角度を変え、消費過程の物質性を考慮することで可能となる。実際のところ、殆どの消費形態は、人とモノとの関係から成り立っている。従って、消費は、人がモノと関わりを持つとする過程（「客体化」）を前提としている。消費者とモノとの関係は、普通の行為（例：服を着る）の上に成立している関係、もしくは、行動や理解を可能にする関係である。つまり、モノは「行為」と「意味の形成」の両方を同時に結びつけているのである。この考え方が、ミラーの思考の中心にある。

これから紹介する論文集は、物質文化研究の新しい傾向に属し、これまでの物質文化研究を引き継ぎかつ掘り下げる研究である。この著作を選んだのは、近年ロンドン大学を中心として発せられている物質文化研究の動きを象徴しているものだと評者が考えたからに他ならない。ここ20年ほどの物質文化研究をめぐる多産な議論の背景には共有された方法論が見られる。しかも方法論上の一貫性がある一方で、取り上げられているテーマが多様であることは、この方法論が持つ生産性の高さを示しているとも考えられ、その『現代民俗学研究』版はいかに可能かを考えてみるならば興味深いものとなろう。この著作に取り上げられている物質文化の多様性そして分析されている「人とモノの関係」は、学術上の垣根を取り払って、消費過程だけでなく人とモノとの関係を注視した際に物質文化研究が発揮するであろう可能性の魅力ある一例を示していると思えるのである。

2. 物質文化研究の新しい試み—ダニエル・ミラーの『マテリアルカルチャーズ』

（1）本書の目論見

ダニエル・ミラーは、ロンドン大学の人類学者である。彼は人とモノの関係を中心に物質文化と消費を研究してきた。彼が物質文化研究を主導する研究者として位置づけられることになったのが *Material culture and mass consumption* (1987) である。多作の研究者で、1987年よりこれまで20冊余の編著を手がけてきた。彼の研究に特徴的な点は、大量消費のような主題に取り組むための基盤として、物質文化研究を再構成することである。その主たる成果としては、人類学・哲学・社会学といった分野の諸概念を動員して、現代消費社会研究にどのように物質文化研究を有効活用できるかを示したことにある。西欧での物質文化研究はまるでミラーの研究をとりまくように成り立っていることを見れば、彼の研究の重要性は理解されよう。

彼は行動としての消費や物質文化を通して社会関係がいかにして作り出されているかを討究してきた。一例をあげると、「モノを手に入れることで人はいかにして愛情や気遣いの関係を築いていくか」や「モノを残したり処分したりすることで人はいかにして別れや喪失を乗り越えようとするか」といったテーマで物質文化研究に民族誌的アプローチを導入した。

ここで取り上げる『マテリアルカルチャーズ』に収録されている諸論文も、ミラーの指導のもとミラーとロンドン大学人類学科の博士課程大学院生及びポスドクによって書かれている。

物質文化研究はすでに確固たるものとなっていたが、ミラーの前出 *Material culture and mass consumption* をきっかけとして物質文化研究は、マルクス主義的アプローチや象徴分析から文化的アプローチ（なかでも民族誌的アプローチ）へと移行してきた。このような物質文化研究にお

ける展開と方向性がこの論文集でも土台として共有されている。

『マテリアルカルチャーズ』の価値は、物質文化の研究がただモノの理解に役立つというだけでなく、価値観や社会問題へのアプローチとしてもいかに効果的に活用できるかを強調し、物質文化研究の射程を大きく広げたところにある。本書においても展開されたこの力強いメッセージとその実例としての諸研究にみなぎる説得力は、その後の物質文化研究に新しい潮流の発生を促したと評者は考えている。

本書の構成を次ページに示す（表 1）。

この著作は、ただの論文の寄せ集めではない。各部は社会的空間によって分かれている。つまり、第 1 部の諸論文は私的空間を扱ったものであり、第 2 部の諸論文は公的空間に関するものである。最終部は、グローバル空間に関する諸論文を集めたものであり、私的空間・公的空間・グローバル空間の関係についての記述がなされている。

収録されている諸論文の内容を詳しく見てみよう。

第 1 部の最初の論文はジョ・タッチのものである。彼女は、主に私的環境を構築する際のラジオ及びその役割に着目している。この研究の対象となっているのは、音を出す機器としてのラジオというより、「音／ラジオ」であり、いわゆるサウンドスケープ・音響空間である。タッチは、特殊な環境を構築する際の音の様々な使用方法を分析し、個人生活や社会生活における音の役割について分析をおこなっている。そして、バックグラウンドミュージックを使用したり、静寂を選択したり、圧倒的な音（踊るための音楽など）を使用するという行為は、それによって作られる社会的環境に直接的な影響を与えている、と述べている。この論文において、音の質感（バックグラウンドミュージックや静寂や圧倒的な音）は、「環境の創造に関与し、環境の性格を決定づけるモノ」として論じられている。音は、世界と隔離したり、別の世界を作ったりするために使われる一方で、特定の世界に属するために使われるのである。タッチは、様々な人と出会って話し合いをした中で、人間関係における音の社会的役割について分析をおこなっている。物質性を持ったその音が人間関係に実質を与える、と考えている。

その次の論文はソフィ・シュヴァリエのもので、彼女は私的（家庭）空間の創造、及び、イギリスの中流階級における住宅と庭の関係に着目している。シュヴァリエは、窓から見える自然を介して庭が住宅を領有（appropriation）してゆくプロセス、及び、家具や調度品を介して住宅が庭を領有してゆくプロセスについて説明をしている。これは、そこに暮らす家族にとっては同じ空間でありながら、2つの空間がそれぞれ別の空間のようになることから、「相互浸食」と呼べるかもしれない。

私的空間に関する最後の論文はアリソン・J・クラークのもので、その中で彼は、家庭内における通販カタログの使用について分析をおこなっている。研究対象として彼が選んだカタログは 2 つあり、1 つは、ロンドンで無料配布されている中古品専門誌の『Loot』、もう 1 つは、新品の量産品を掲載する有料誌の『Argos』である。クラークは、この 2 つの対極的なカタログを選ぶことで、それぞれのカatalogを選んだ消費者の消費経験を分析することができたのである。彼の議論では、どのカタログを選ぶかは、消費経験や消費者の種類を決定するのであった。『Argos』は、そのページをめくることにより、家庭内に消費経験を持ち込み、その家庭内の最も小さな子供ですら消費者にしてしまう。一方の『Loot』は、中古品関連の地方誌であり、経験不足の購入者には不安な気持ちを起こさせる消費経験をもたらす一方、広い知識を持った購入者の興味を引

表1 『マテリアルカルチャーズ』の構成

著者	論文タイトル	ページ
Daniel Miller ダニエル・ミラー	"Why some things matter" 「何故ある種のモノは重要となるのか」	pp3-21
第1部 私的空間		
Jo Tacchi ジョ・タッチ	"Radio texture: between self and others" 「ラジオのテクスチャー：自分と他人の間」	pp25-45
Sophie Chevalier ソフィ・シュヴァリエ	"From woolen carpet to grass carpet: bridging house and garden in an English suburb" 「毛織じゅうたんから芝生じゅうたんへ：イギリスの郊外における家と庭の繋がり」	pp47-71
Alison J. Clarke アリソン・J・クラーク	"Window shopping at home: classifieds, catalogues and new consumer skills" 「家からウインドーショッピング：新聞広告やカタログ誌と消費者の新しい技能」	pp73-99
第2部 公的空間		
Andrea Pellegram アンドレア・ペルグラム	"The message in paper" 「紙でのメッセージ」	pp103-120
Neil Jarman ネイル・ジャーマン	"Material of culture, fabric of identity" 「文化の物質、アイデンティティの生地」	pp121-145
Justin Finden-Crofts ジャスティン・フィンデン＝クロフツ	"Calypso's consequences" 「カリブソの影響」	pp147-166
第3部 グローバル空間		
Daniel Miller ダニエル・ミラー	"Coca-Cola: a black sweet drink from Trinidad" 「コカコーラ：トリニダードから来た甘くて黒い飲み物」	pp169-187
Sigrid Rausing シグリド・ラウジンク	"Signs of the new nation: gift exchange, consumption and aid on a former collective farm in north-west Estonia" 「新生国家の兆候：北東エストニアの元集団農場における贈り物交換、消費、援助」	pp189-213
Mark Johnson マーク・ジョンソン	"At home and abroad: inalienable wealth, personal consumption and the formulations of femininity in the southern Philippines" 「我が国と外国：南フィリピンにおける譲渡不可能の財産、個人消費と女らしさの策定」	pp215-238

き寄せる傾向がある。『Argos』がよく制御された世界を提供しているのに対し、『Loot』は賭けに近い経験を提供しているのである。つまり購入者は、中古品の不確定要素と、他人が所有・放棄したモノの持つ感情的な要素とを、受け入れるのである。

それに続く3つの論文は、公的空間に研究対象をおし広げたものである。つまり、家や庭といった私的空間から離れ、モノの社会的関与に着目している。

アンドレア・ペルグラムは、オフィスにおける様々な紙の使用について、また、それらが発生させる意味について、検討をおこなっている。彼は、内輪的な性格を持った「付箋」から企業イメージを表わす「レターヘッド」までを対象に、紙の使用の習慣を検証した。彼は、紙に書かれた内

容はさて置き、紙の形態が発する暗黙のメッセージに注目したのである。確かに、紙自体はメッセージを運ぶモノでしかない。特にオフィスにおいては根付いているが、企業内序列における個人の地位と反比例するような形で使用されている。つまり、ヒラ社員は、丁寧にタイプして注意深く見直した書類を上司に提出するのに対し、その上司は、手書きのメモを返すのである。この論文は、（記録資料になっている）紙に与えられた「殆ど侵すべからざる重要性」と、お祭り気分でその一部が破棄される解放的な瞬間についての記述で締めくくられている。

続く論文はネイル・ジャーマンのもので、北アイルランドのプロテスタントのパレードの際に使われる旗が取り上げられている。歴史的背景と象徴的な重みを持つこの旗は、プロテスタントのアイデンティティーを表すモノである。ジャーマンはまず、この旗の物質性（麻で作られているという事実）に着目し、同地域の織物産業の社会的及び歴史的役割とこの旗との関係について明らかにしている。この関係は重要なものである。ところがこの旗は、それを使う人たちにとってのシンボルであるだけでなく、それを見ている人たちにとってのシンボルであることから、この旗の政治的重要性が理解できるのである。つまりこの旗は、確固とした史実を持ち出すことなく歴史を示す方法として使われている。但しジャーマンは、その歴史が、意図的に選ばれた歴史であったり、人々と状況に有利な歴史であったりすることがある、とも指摘している。つまり、モノは、歴史のある特定の解釈を語り、そのために使われるのである。

公的空間についての論文を集めた第2部を締めくくるジャスティン・フィンデン＝クロフツの論文は、トリニダードのカリプソの社会的影響について論じたものである。大衆音楽であるカリプソは、社会的・政治的な性格を持っており、隠喩による社会批判が半ば公然とおこなわれる。フィンデン＝クロフツは、政治よりもずっと小さな影響力しかないのに結局は政治に影響を及ぼすことになるカリプソに対するトリニダード人の両面的感情に触れている。彼はまた、この影響が政治的背景と関連がない社会空間にも及んでいると指摘し、カリプソのひとつとしてドンキーダンスという踊りの登場が社会に引き起こした変化を例に挙げている。

最終部はグローバル空間に関するもので、私的空間・公的空間・グローバル空間の3つの空間の関係が明らかにされている。また、アイデンティティーに関する重大なポイントについても述べられている。

この第3部の最初の論文はミラーのもので、コカコーラがグローバル化のシンボルとして使われる傾向があること、その一方でコカコーラが「再ローカライズ」を目指しているということ、について述べている。そして、トリニダードにおけるコカコーラや他の清涼飲料の使われ方や意味を検証している。彼は、現地において飲料を「赤い飲料」と「黒い飲料」に分ける伝統的な分類方法について、それが民族的分類とつながっていること、つまり、赤い飲料がインド人と結びついていて黒い飲料がアフリカ人と結びついていてということを指摘している。しかしながら、実際の消費は、こうした分け方を反映していない。実際のところ、これらの飲料はアイデンティティーを示す道具となっており、別の民族のシンボルである赤い飲料を飲むことで、アフリカ人はトリニダード人としてのナショナルアイデンティティーを補っている。一方、インド人はアフリカ人に結びついていて黒い飲料を飲むことで同じくトリニダード人としてのナショナルアイデンティティーを補っている。ミラーは、コカコーラのグローバル商品としての地位を認めつつ、グローバルな商品がまさにグローバルとなっていくその過程には、それぞれの場所におけるローカルな展開があるのだということを事例から示し、一見普遍的に見える現象の裏にある個別性の

世界へと目を向けることのおもしろさを主張している。

続くシグリッド・ラウジングの論文においては、幾つかの西洋のモノが持つ意味と、それらのモノが歴史的・文化的背景に応じて変化するということが検証されている。彼は、自らの考えを証明するために、スウェーデンの援助によってエストニアの昔の集団農場に送られたモノや、西洋から来たそれらのモノに結びついた歴史やアイデンティティーの問題の重さにふれている。

グローバル空間に関する最後の論文は、フィリピン女性のモノについてである。この論文の中でマーク・ジョンソンは、（特に結婚式で着用される）伝統的な衣服と現代の衣服との違いと、それらのどちらかを選ぶ際の社会的含意について述べている。彼は特に、教育を受けた女性が両方の長所を取り混ぜた中間的な衣服を選ぶケースが増えていることに着目している。この論文は、ジョンソンが衣服を通して女性の特性とローカル文化を検証したものといえよう。

（2）従来の物質文化研究における位置づけ

『マテリアルカルチャーズ』の副題 *Why some things matters* は翻訳すると、「何故ある種のモノは重要なのか」又は「ある種のモノが重要なわけ」となるが、これはミラーの研究の主たるテーマである。

ミラーはこの論文集を物質文化研究の進展の第2段階に位置づけている。彼によれば第1段階は、アルジュン・アパデュライやピエール・ブルデューやミラー自身らが人間を理解するに当たって物質文化を研究対象として有意義であり、重要であると主張した段階である。モノと社会を切り離すことができない以上、物質世界にこだわるのが、フェティシズムにはならないということを証明するために心血が注がれた段階であった。その考えは、1980年代に発達した物質文化研究の中に見て取れる。

一方、第2段階とは、物質文化（マテリアルカルチャーズ）の多様性に注目することであり、そうした手法がもたらす結果に関心が注がれている。そして彼は、様々な異なる物質文化そのものに光を当てることを提案している。その根底にあるのは、しばしば物質文化研究は、オーソドックスな人類学が見逃しがちな文化現象に対する様々な観点を与えてくれる、という考え方である。

1990年代の中頃は、物質文化研究に対する関心が再び高まった時期であった。しかしながら、一個の学問としてはこれまで成立してこなかった。逆に物質文化研究の境界が引かれていなかったことで、多くの利益があった。還元主義の束縛から解放された自由なアプローチが可能だったことは、そのひとつの例である（たとえばミラーは、「家の研究をしようとする時に、家屋研究に固執する必要はない」と記している[Miller 1998: 4]）。本書は、こうした方法論を明示している。

既に述べたように、物質文化研究は、それ自体が目的ではなく、社会・文化人類学や考古学といった大きな研究分野における研究のための方法論やツールであった。ミラーは、研究目的について説明する序文の中で、このような従来の学問世界の傾向に真っ向から反対の立場をとり、物質文化研究それ自体を研究の中心に据えるのだと主張している [Miller 1998: 10-14]。

（3）ミラーのアプローチ—物質文化研究の可能性を生かす

モノに関する一般理論に頼ることなく、物質世界に専念するために、ミラーは「物質分野の多様性」と「特定分野に特有の物質性」という2点に着目する必要性を強調している。

物質文化研究の特徴のひとつは、他の研究分野と比べた時の研究対象の多様さである。物質文

化が我々の周りで常に変化していることを考えれば、これは容易に理解できることであろう。それぞれの物質文化が固有の特性を持ち、その内部に多様性をはらんでいるのである。

もちろん、物質世界の全てをカテゴリーごとに分類し列挙することは不可能である。どのようにしても、恣意的な分類になってしまうであろう。物質世界の特徴であるこの著しい多様性が、物質文化研究の形成を困難にしている要素のひとつであるが、同時に、学術的意味という点から見れば無限の可能性の源でもある。従って、一見して問題と思われる点を注目すべき点とし、物質文化研究の方向を変えることが不可欠である。ミラーのこの提案は単純すぎるように思えるが、学術分野の区分を気にするあまり今まで誰も取り組まなかったことを彼は進んで開拓しようと努めているのであり、物質文化研究の未だ活用されていない可能性についても述べ、実践してきている点は評価されてしかるべきである。

物質文化の一般理論を確立させるためには、物質性の持つ一般性に着目すると同時に、様々な物質文化の特性にも注意を払う必要がある。このような観点から幾つかの試みがなされ、食文化研究や服飾研究、建築研究等、特定の物質分野に特化した研究がおこなわれてきた。それらの名前が示す通り、これらの研究は、物質文化の特性の研究に特化したものであり、物質文化の包括的研究ではない。ミラーは、そうしたアプローチの（そして現在の学術界の）主な欠点は、既存の研究分野に属していれば、それは意味がある研究テーマであろうと見做すような考え方そのものだという、もっともな指摘をしている。

この論文集は、そのような既存の考え方とは一線を画する研究である。テーマの殆どは、既存の研究分野のひとつの中におさまらない。おそらく、言葉の本来の意味における人類学の範疇に入るであろう。この点でも、ミラーの研究には意義があるといえよう。学術分野の区分に従うために研究者が自らの扱うテーマを限定してしまう必要はないのである。ミラーのアプローチの長所は、研究テーマのもっと自由な選択を可能にするという点にある。

モノが社会において為すことを検討することが、ミラーが定義する物質文化研究に必要な要素である。背景抜きの物質性探求は、これまで懸念されてきたフェティシズムの方向へ向かってしまいが、モノが属している特定の背景も把握した上での物質性探求は、社会的現実及び関わっている人間をよりよく理解するための方法論として使うことができる。

ここで重要な点を2点指摘できる。まず、モノの物質的特徴にこだわることで、それらのモノが指し示している生活と文化的価値の微妙な関連性を、モノを通じて明らかにすることができるといふ点である。ジャーマンの旗に関する論文がその一例である。その旗の素材は、社会・歴史的な文脈において地域と深い関係にある特定の意味を持っている。こうした側面を無視すると、研究が萎縮してしまう。モノの物質性は、けっして偶然の産物ではなく、物質性それ自体がよく考慮されるべきである。次には、既存の研究分野の枠を外し、特定の物質文化を扱うものとして研究テーマを設定すると、新しく独創的な洞察が出てくる可能性があるという点である。限定的な学術アプローチからくる成果は現実の本当の深さをまるで反映しえない。モノ自体が持つ特殊性とその現実世界における背景を含めてモノを研究するべきだという主張が2点目の指摘である。これら2点が本書においてミラーの提唱する新しい物質文化研究方法である。

おわりに

本稿で紹介した論文集にあるようなミラーらの研究は、モノは人間の経験の中であまりにも中心的な役割を果たしているため、物質文化への理解なしで人間を理解することはできない、という前提に基づいている。人のほとんどの行動は、物質文化と関連している。人は、モノが溢れる環境に完全に浸かっているのである。

ミラーは、物質文化研究はしばしば、人類学が無視しがちな文化的過程に関する手掛りを提供してくれる、と主張しており、論文集の中では、各所においてその見解が裏付けられている。

この論文集からは、筆者が期待をいっている物質文化研究の方法論としての可能性が垣間見えてくる。この新しい物質文化研究は、「消費過程」そのものではなく消費過程における「人とモノの関係」を中心に据えるものであり、モノについて真摯に考えるものである。こうした方法により、軽率で還元的な批判や人間のモノへの服従という言説からモノが解放されるとともに、モノを研究に値する対象物に戻すことができるのである。このアプローチは、研究上現実主義的であると同時に、モノとの絶えざる接触が社会・文化的生活の規範であり条件となっている現代生活の実態にも即しているように思える。

モノは、単なる実用品ではなく、意味の重ね合わせでもない。ただ「束縛するモノ」でも、ただ「束縛を解くモノ」でもない。モノは、その物質性の範囲内において存在するのであり、主体との関わりの中でその範囲を越え、主体を変えうるのである。つまり、モノは、無機物のかたまり以上のものであり、機能し、意味を発し、作用し、作用させ、表現し、心を動かす。モノは、特定の行為を遂行するための手段であると同時に、社会的環境の中で人間を投影し、人間を表現する。

本稿の冒頭において、物質文化という概念が様々な研究分野で議論に挙がっているが未だに特定の研究分野には属していない、と述べたが、それはこれからの研究者の取り組み次第でどうにも展開しようという点で都合の良いことだといえよう。

全てのモノは同じではない。日常生活には、様々な性質・形状・機能・意味・素材のモノが溢れている。しかしながら、物質文化という概念を用いると、今まで違う研究分野に属していたデータの比較ができるのである。物質文化研究は、ことなる学問に出自を持つ研究たちの出会いの場である。主体・客体（モノ）・文化の構成を考える上で役立つ概念である。人類学者の多くは、物質文化研究を人の活動を理解する上での出発点であると考えている。「物質文化」という言葉は、社会の最も具体的な側面の裏側に、社会の隠れた顔が、即ち、社会の構成メンバーの行為や表象の源にある規範及び価値観の体系が、透けて見えるということを含意している。

物質文化というものは、物質と行為との間で関係論的に定義される。「鉛筆は筆記用具である」というようにある物質について単一の物質文化像が固定的、絶対的に紐付けられ予め存在しているものではない。使用される状況や使用者が変わると、モノは別のモノになる。従って、物質文化について論じるに際にも、（ひとつの）物質文化を想定してかかるのではなく、ミラーがいうように、個々の文脈に応じて特有の複数の物質文化（「マテリアルカルチャーズ」）の存在を想定し、背景とともに物質を論じることが適切であろう。

註

- (1) 共著 *The world of Goods, towards an anthropology of consumption* (1979) は、デュルケム流の考え方を現代の消費の問題に適用した試論である。

文献

- Appadurai, Arjun. 1986. *The social life of things: commodities in cultural perspective*. Cambridge: Cambridge University.
- Barthes, Roland. 1985(1957). *L'aventure sémiologique*. Paris: Le Seuil.
- Baudrillard, Jean. 1968. *Le système des objets*. Paris: Gallimard.
- Bourdieu, Pierre. 1979. *La distinction, critique du jugement social*. Paris: Les Editions de Minuit.
- Bourdieu, Pierre. 1980. *Le sens pratique*. Paris: Les Editions de Minuit.
- Dittmar, Helga. 1992. *The social psychology of material possessions: to have is to be*. Hemel Hempstead: Harvester Wheatsheaf.
- Douglas, Mary and Isherwood, Baron. 2001 (1979). *The World of goods, towards an anthropology of consumption*. New York: Basic Books.
- Durkheim, Emile. 1968 (1912). *Formes elementaires de la vie religieuse*. Paris: Presses Universitaires de France.
- Durkheim, Émile and Mauss, Marcel. 1903. De quelques formes primitives de classification. Contribution à l'étude des représentations collectives. *L'Année sociologique* 6.
- Griaule, Marcel. 1957. *Méthode de l'ethnographie*. Paris: Presses Universitaires de France.
- Lévi Strauss, Claude. 2003(1958). *Anthropologie structurale*. Paris: Press Pocket.
- Lévi Strauss, Claude. 1990(1962). *La pensée sauvage*. Paris: Press Pocket.
- Marx, Karl. 1959(1867). *Capital: a critical analysis of capitalist production*. Moscow: Foreign Languages Publishing House.
- Mauss, Marcel. 1967 (1947). *Manuel d'ethnographie*. Paris: Presses Universitaires de France.
- Miller, Daniel. 1987. *Material culture and mass consumption*. Oxford: Blackwell Publishers.
- Miller, Daniel(ed.). 1998. *Material cultures: Why some things matter*. Chicago: University of Chicago Press.
- Miller, Daniel. 2001. *Home possessions: material culture behind closed doors*. Oxford: Berg.
- Riggins, Stephen Harold(ed.). 1994. *The socialness of things: essays on the socio-semiotics of objects*. Berlin: Mouton de Gruyter.